

第5回国際バラシンポジウム、岐阜で開催

岐阜県立国際園芸アカデミー

上田 善弘

本年(2009年)5月24日から5月28日まで、岐阜県にて「第5回国際バラシンポジウム」が開催された。私はこのシンポジウムのコンピナー(招集者、主催者)として会議を主催したので、その概要について紹介させていただく。

国際バラシンポジウムの開催まで

正式にはこのシンポジウムは「5th International Symposium on Rose Research and Cultivation」という。あえて日本語訳すると、「第5回 バラの研究と栽培に関する国際シンポジウム」ということになる。

本シンポジウムは国際園芸学会(ISHS、International Society for Horticultural Science)の下に開催される専門部会で、バラの場合は4～5年おきに世界各地で開催されてきた。バラの研究に携わっている世界各国の研究者が集い、最新の研究成果を発表、討議し、お互いに情報交換する唯一の国際シンポジウムである。これまでの第1回から第4回までの開催は以下のようにあった。

第1回 イスラエル(1985年)

第2回 フランス・アンティープ

1995年2月20-24日、発表課題:77課題、

参加者100名(内フランス36名)

第3回 イスラエル・ヘルツリヤ

2000年5月21-26日 発表課題:基調講演1、

一般講演:口頭37、ポスター15、

参加者89名(内イスラエル24名)

第4回 アメリカ・サンタバーバラ

2005年9月18-22日 発表課題:口頭34、

ポスター40、参加者96名(内アメリカ43名、24ヶ国)

第1回が開催地のみになっているのは、最初だけ私が参加していないためである。有名なバラ育種会社、メイアン社のお膝もと、フランスのアンティープで開催された第2回のシンポジウムに私は初めて参加した。100名ぐらいの

参加者でそれぞれがお互い親しく交流でき、このようなシンポジウムなら毎回参加しようと思ったものである。第1回から第2回までは10年も空いてしまったが、その後は5年おきに開催されてきた。第4回はカリフォルニアのサンタバーバラで開催され、バラの品種改良、苗生産で有名なジャクソン&パーキンスの苗の生産圃場を視察した。とてつもなく広大な生産圃場にどの参加者も唖然としたものである。

さて、この第4回アメリカ大会の際に次回の開催を日本の岐阜で開催したいという意思表示を私の方からさせていただいた。通常、会期中にこのシンポジウムの中心となる方々が集い、次回の開催地について審議される。私の意思表示を受け、日本も開催候補地の一つとされた。本来、開催は5年後であるが、2010年には親学会である国際園芸学会の開催年であるため、重ならないようにと2009年に開催することが決まった。

このバラシンポジウムは国際園芸学会の傘下にあるため、あくまで主催者は国際園芸学会で、シンポジウムの開催は学会本部の決まり事にしぼられることになる。まず、国際園芸学会から提案書の提出依頼があり、岐阜で開催することの意義、内容等を盛り込んだものを観賞植物部会長に提出し、審議され、国際園芸学会理事会で承認されるという運びになる。今回はもう一つの開催候補地、ドイツが開催を辞退したため、自動的に岐阜で開催することが決定した。それを受け、国際園芸学会会長と私が所属する岐阜県立国際園芸アカデミー学長が契約書を交わし、実際の業務がスタートすることになった(2007年8月31日に契約)。専門委員会(海外のバラ研究者を含む)と開催地の組織委員会を立ち上げ、開催にむけての準備、具体的な開催計画の審議を進めていった。組織委員会は当アカデミーの教員3名(私を含む)、岐阜大学の教員2名、岐阜県農業技術センターの研究員2名で構成した。会期は当地、岐阜が誇る「花フェスタ記念公園」のバラの最盛期を見ていただくことを前提に5月の最終週とした。一年半前にシンポジウムを公開し、参加登録の



長良川国際会議場にて集合写真

できるホームページを立ち上げた。

シンポジウムを開催し、参加者を歓待するにはそれなりの資金が必要となる。そのため、各種の国際会議開催への助成金に申請、さらには民間企業への協賛を依頼した。ところが、昨年秋以来のリーマンショックによる世界的な経済不況により資金集めが困難となり、参加者数も減少し(円高等による海外からの参加者への負担増)、窮地に追い込まれることになってしまった。当初は、出来る限り潤沢な資金を集め、多勢の方に参加いただき、大いに盛り上げようと計画していたのであるが、大幅に計画を縮小せざるを得なくなってしまった。さらには今年になってから、新型インフルエンザが発生、流行し始め、本当に開催できるのか、直前まで分からない状況であった。

研究発表

直前までやきもきしたものの、何とか開催することができ、海外から11ヶ国38名、日本からは学生も含めると71名の参加者があり、シンポジウムとしての体裁は整った。

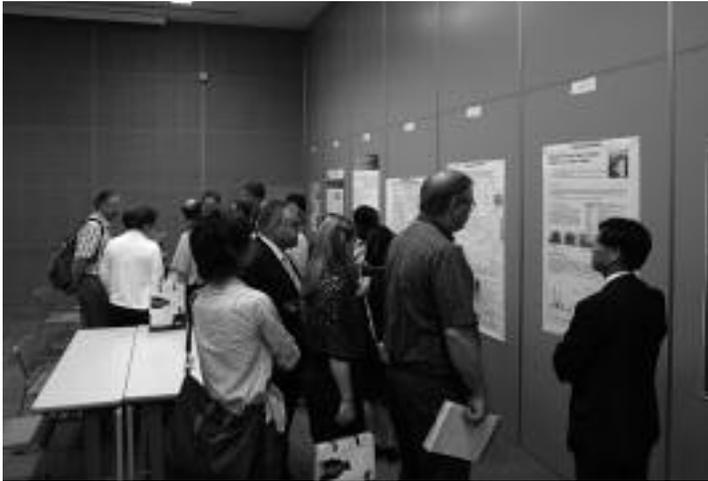
会場は、岐阜市の長良川国際会議場と可児市の花フェスタ記念公園花のミュージアムとした。長良川国際会議場では5月24日夕方から歓迎会、25、26日に研究発表を、花フェスタ記念公園では5月28日に研究発表とバラ園視察、フェアウェルパーティを開催した。長良川国際会議場

は岐阜市内、駅から北に車で15分ほど、長良川沿いにあり、有名な建築家安藤忠雄氏の設計である。国際会議室は最上階5階にあり、卵形をしている。演台側(スクリーン側)が長良川に面し、扉を開けると正面に金華山と岐阜城、眼下には長良川の清流と鶴飼い船の発着場、絶景な眺めである。どこにもないすばらしい会議場で、歓迎会もこの会議場で開催し、参加者には夜遅くまで歓談、堪能していただいた。

さて、研究発表であるが、今回は口頭発表31課題とポスター発表28課題の発表があった。これらの研究発表以外に、静岡大学名誉教授の大川清先生に基調講演をお願いした。演題は「日本の切花バラ産業の過去および将



長良川国際会議場での歓迎会 長良川を見ながら交流を深める



ポスター発表会場

来」で、バラの研究者として長く関わって来られた視点から、日本の切花バラ産業がどのような変遷を経てきたか、アーチング栽培法のような新しい技術開発、近年の輸入バラ攻勢、燃料高騰にどのように立ち向かえばいいのかの提言までをご講演いただいた。大川先生はこの国際バラシンポジウムの立ち上げにも関わっておられ、第1回のイラエルでのシンポジウムの参加者でもある。この立ち上げに関わったメンバーをその当時、ローズマフィアと呼んでいたこともご紹介いただいた。今回の参加者のなかには先生の古くからの研究仲間もおられ、旧交を温めておられた。

口頭発表31課題の内訳は、植物生理2課題、繁殖4課題、遺伝資源2課題、花の香り1課題、育種6課題、遺伝7課題、病害虫4課題、栽培3課題、ポストハーベスト2課題と幅広い発表内容であった。ポスター発表は国際会議室とは別の会議室で、各発表者が研究成果をポスターとして掲示し、参加者とポスターの前で研究内容について議論するものである。



花フェスタ記念公園ミュージアムホールにて研究発表

また、第4回のアムリカ大会では、サントリーの田中良和氏が遺伝子組み換えによる青いバラの研究発表をされていたことから、今回のシンポジウムでは、ポストツアーでサントリーの山崎の研究所を視察する予定であった。ところが、新型インフルエンザの流行により、サントリー側で感染国からの視察者を受け入れないという連絡が入り、視察できなくなってしまった。そのため、シンポジウムの会場に遺伝子組み換えにより育成された実際の青いバラを田中氏が持参され、展示、説明いただいた。海外からの参加者にとっては初めてのことであり、好評を博した。

大会4日目には研究発表会場を花フェスタ記念公園に移した。この会場では、日本のバラ生産者にも公開とし、そのために同時通訳も準備した。課題についても、生産者にも有用な情報源として、病害虫、生産、ポストハーベストに関するものを集め、発表していただいた。研究発表を午前中とし、午後からは最盛期を迎えた花フェスタ記念公園のバラを見ていただいた。

夕方からはミュージアムホール内のレストランにてフェアウェルパーティを開催した。パーティでは、岐阜県内の切花バラ生産者、市橋滋利氏(千葉大園芸学部卒、花業会会員)の奥様 市橋若菜さんによるオンドマルトノ(フランスの古い電子楽器)の演奏をお願いし、会を大いに盛り上げていただいた。

産地視察

このシンポジウムの大きな特色として、名称のなかに「栽培」と入っているように、現地視察が組み込まれていることが挙げられる。今回も中日、3日目に一日、バラの生産現場の視察を行った。

まず、愛知県西尾市にある農事組合法人レインボーを訪問した。この法人では大規模な連棟温室で切花バラが生産されており、ヒートポンプ、除湿機等が入れられ施設内環境が自動制御されている。また、作業は主にフィリピンからの研修生により行われている。

その後、地元岐阜県に戻り、神戸町の全天候型バラ観賞温室内で昼食をとり、周辺のバラ生産組合の切花バラ生産を視察した。続いて大野町のバラ苗生産者、河本バラ園を視察した。岐阜県のバラ苗生産は全国一であり、



花フェスタ記念公園のバラを視察する参加者

水田を利用した根頭がん腫病等の病害を回避する日本独特の苗生産の様子と河本バラ園での育種の実際について視察した。最初の視察地が遠方でもあり、予定が全体に遅れていたが、最後の視察地、セントラルローズではミニバラの大規模生産の現場を見せていただいた。

最終的には参加者は5名になってしまったが、予定通りツアーを行った。ポストツアーは当初から関西方面で計画しており、サントリー研究所の代わりに滋賀県守山市の国枝バラ園を視察、その後、京都にて清水寺、金閣寺、大徳寺、平安神宮を1日半かけて視察した。このツアーへの参加者は、オランダ、イタリア、エクアドルの研究者であった。



産地視察にて 農事組合法人レインボーの切花バラ温室

ポストツアー

上述のように、ポストツアーの目玉であったサントリー研究所の視察がなくなってしまったため、ツアーの参加者が減ってしまった。そのことによる参加費の値上がりにより、

以上、本シンポジウムは4年前の第4回シンポジウム後に構想し、準備期間に2年を要した。資金的なことや今回の新型インフルエンザにより直前まで開催が危ぶまれたが、何とか無事開催することができた。この国際シンポジウムは千葉大から岐阜に異動した際に、いつか岐阜へ誘致したいと常日頃思っていたものである。開催期間中、また開催後も参加者から素晴らしいシンポジウムであったとお褒めと感謝の言葉をいただき、その達成感と充実感に長期戦の疲れも吹き飛ばす思いであった。同時にこのシンポジウムの開催にご理解をいただき、多大なご支援を頂戴した団体、民間企業、さらにはシンポジウムの運営を支えていただいた岐阜大、名古屋大のスタッフ、学生の皆様に感謝する次第である。